肩書に悩む

作家・探検家
あるいは放浪家
角幡唯介

今から七年前、某大手出版社の新人ノンフィクション賞を受賞して一応物書きとしてデビューというかたちになったとき、その出版社が主催する授賞式によばれたことがある。授賞式は私が受賞した賞だけでなく、小説の新人賞や、直木賞を受賞したような売れっ子作家が対象の文学賞も一緒で、会場も帝国ホテル、各賞の選考委員をつとめる一流作家の先生方や彼らをねぎらう銀座のホステスたちも一堂に会して、それはそれは絢爛豪華な式典だった。

式典の前に私たち新人系の賞を受賞したひよっこ三人が、売れっ子が対象の文学賞を受賞した有名作家と挨拶する機会があった。当たり前だが、その作家への出版社の対応はわれわれとは別扱いで、私は地下鉄と徒歩で帝国ホテルにむかったのに対し、その作家には自宅にハイヤーが回されたとのことだった。楽屋も別だった。

ひとりずつ挨拶をかわしたが、私はその作家の作品を何作か読んでいただけに、順番がまわってきたときは少し緊張した。「○×賞を受賞した角幡といいます」と名刺をわたすと、作家は「あ、すみません、私、名刺を持っていないので」と言って名刺をくれなかった。

その堂々とした態度に、かっこいいな、この人、と思った。そのとき私ははじめて知ったのだ。そうか、売れっ子作家になると名刺をわたさなくていいのかと。それに比べて私の名刺の貧相なこと。自宅のプリンターで印字したペラペラの紙に、〈ライター〉ととってつけたような肩書が記されている。格の違いを見せつけられ、こんなもの、むしろわたさない方が良かったのではないか、と少し後悔した。

それ以来、私の肩書は微妙に変遷しつづけた。まず〈ライター〉を名乗るのをやめた。そもそもその頃、私はライター仕事など一切やっていなかった。そのかわり〈ノンフィクション作家・探検家〉という肩書にした。ライターも作家も物書きという意味では同じだが、作家を名乗るには別の条件があって、文章で世界を構築できていなければならない。私は探検行為という実体験を通じて独自の世界を文章化しているわけだから、これがピッタリだ、と考えたわけだ。しばらくそれで通したが、だがこれもそのうち煩わしくなってきた。なにしろこの肩書は長すぎる。ナカグロ含めて十四文字もあるのだ。それで最近は〈作家・探検家〉と称することが多くなった。

私にとってどのような肩書を名乗るのかというのはかなり重要な問題だ。というのも私の場合、探検して文章で表現するという他にあまり類例のない活動をしているため、社会の側から肩書を与えてくれないからである。企画課長とか金型職人とかあらかじめ決められたポジションが社会にないので、自分で作らなければならない。つまり自称するわけだ。

自称というと自称・探検家みたいに胡散臭いイメージがつきまとうが、べつに悪いことではない。そもそもわれわれのように組織に属していない者の肩書などどこまでいっても自称。事件報道などで警察が容疑者を〈自称～〉などと発表するときなど、一体自称じゃない自由業者など存在するのかと疑問に思うほどだ。自称とは、自分の活動を的確に表現する言葉を見つけることであり、それと実際の活動がマッチすれば肩書として社会的に機能し、このように執筆依頼などがまいこんでくる。

探検家と自称することで確実に自分は社会のなかに専用の居場所を確保できている、との感触が私にはずっとあった。ところが、ここ最近、新たな悩みが生まれてきた。どうも探検家という肩書に自分自身が束縛されているのではないかという気がしてきたのだ。

どういうことかというと、たとえば来年、私は相棒の犬と一緒に、自力で可能なかぎり、できれば三カ月以上、無人の北極の氷原を歩きたいと思っている。正直そこにあまり探検的要素はないのだが、探検家を名乗ってしまっているせいで、つい、そのさほど探検的ではない行為に無理やり探検的な味付けをほどこしたほうがいいだろうかなどと余計なことを考えてしまうのである。

たしかに私はこれまで探検と呼んでもいい旅を何度か行ってきた。しかしこれからやりたい旅がすべて探検かと言われると、そうでもない気もする。来年の計画などはむしろ単なる放浪。そこでいっそのこと〈放浪家〉に肩書を変えてしまおうかと思うことさえあるのだが、それとてちょっと難しい。なぜなら私には家族がいて、最近ではマイホームを購入するなどという決断までしてしまっており、マイホームのある放浪家などあり得ないからだ。である以上、それを名乗るには家族を捨て、マイホーム契約を撤回するしかないわけだが、さすがに肩書にあわせてそこまで人生を変えるのもバカバカしい。それこそ人生が肩書に束縛されることになってしまうではないか。

肩書とやりたい方向性にズレが生じたとき、みんないったいどうしているのだろう?

やはり名刺を捨てて肩書から逃れるしかないのだろうか。あるいは自分の過去を引きずって何も変えずに生き続けていくしかないのだろうか。答えの出ない謎である。



角幡唯介
かくはた ゆうすけ

1976年,北海道生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。同大学探検部OB。2003年,朝日新聞社に入社,08年に退職。『空白の五マイル』で,開高健ノンフィクション賞,大宅壮一ノンフィクション賞,梅棹忠夫・山と探検文学賞受賞。『雪男は向こうからやって来た』で新田次郎文学賞受賞。『アグルーカの行方』で講談社ノンフィクション賞受賞。近著に,『探検家の日々本本』(幻冬舎文庫),『漂流』(新潮社)など。